

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

現代移民の多様性：  
トランスナショナル時代のウンバンダ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Arakaki, Ushi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001170">https://doi.org/10.15021/00001170</a>

# トランスナショナル時代のウンバンダ

USHI ARAKAKI

## 1. はじめに

本論では、ブラジルにその起源を持ちながら、ブラジルから国境を越え、移民とともに伝播した宗教であるウンバンダ (Umbanda) の日本における状況について論じる。日本におけるウンバンダに関してはいままで、ブラジル移民にとっての重要性にもかかわらず、ほとんど触れられることはなかった。

以下、最初に、日本に住むブラジル移民について簡単に触れたあと、ウンバンダの歴史、教義、ならびにウンバンダの信奉者への影響について説明する。用いるデータは、主として筆者が、ウンバンダ活動への参加者に対する観察、および面接を通じて集めたものである。本論では、この民族誌的データをもとに、ブラジルから越境し、日本社会の中で孤立しがちな傾向のあるブラジル移民にとって、ウンバンダ活動がいかなる意味を持つのかについて論ずる。

## 2. 日本で暮らすブラジル日系人

### 2.1. 概況

1980年代、ブラジルは深刻な経済危機に陥る一方、日本では急速な経済成長が続いて労働力不足に直面し、それまでのブラジルと日本の間における移民の流れが逆転した。ブラジルの日本人移民の子孫が、両親や祖父母の祖国に向かって移住を開始した。彼らは「帰国移民」と呼ばれている (Takahashi 1995; Sellek 1997; Tsuda 1999; Brody 2002)。日本政府が1990年に出入国管理法を見直した際、日系人、その配偶者と子供等、第3世代まで正式な在留資格を認め、日本で暮らして働くことが容易になったことで帰国移民の勢いが増したのである。

以来、日系ブラジル人は社会的ネットワークを拡大した。その結果、彼らの日本での生活は当初の「経済的な挑戦」を超えるものへと変貌した。日系人達は、日本のブラジル人社会のなかで生活を見だし、それは、残業手当や基本給引き下げをもたらした長引く不況にもかかわらず、日本での滞在を延長したいと考える十分な動機となった。日本経済の停滞にもかかわらず、日系ブラジル人の数は増大してきた。日系人の中には日本とブラジルの間を往復する者もいた。しかしそうでない者達は、ブラジル人としての独自性を保ちつつ日本に定住することを決定した (Roth 2002)。

2005年、日本で暮らすブラジル人は302,000人であった<sup>1)</sup>。これは外国人の中で3



写真1 昼食をとるブラジル人の作業者達

番目に大きな勢力である<sup>2)</sup>。最近の多くの研究では、日系人は6つの少数集団（アイヌ、部落民、中国人、韓国人、日系人、沖縄人）の1つに分類されている（例えば、Weiner 1997 を参照）。

ブラジル人の大部分は、大都市以外の製造産業が盛んな地域に集中している。ブラジル人は日本全国に分散しているが、最大のコミュニティーは愛知県、静岡県、神奈川県、長野県、群馬県、三重県、埼玉県、岐阜県、栃木県、茨城県に存在している。

日系人のほとんどが自動車や家電製品部品の組立てラインで機械作業に従事しているが、中には製紙工場や食品加工工場で働く者達もいる。

他の移民グループと比べると、日本にやってくる日系ブラジル人の場合男性と女性の数がほぼ等しい。その多くが学齢期の子供を持ち、もしくは日本で子供をもうける計画を持っている（Roth 2002）。

## 2.2. 日系ブラジル人コミュニティ

人、商品、資本、情報が国境を越えて行き交い、各国でトランスナショナルな社会が生まれている（Basch *et al.* 1995; Foner 1997; Mintz 1998; Portes and Rumbaut 1996）。コミュニケーションと輸送技術の進歩によって越境の速度、効率、量が高まり、世界は根本的に再構成されてきた。このような状況を見ると、今日の国際社会はかつてのものとは異なるのではないかという印象を受けるかもしれないが（Mintz 1998）、基本的に異なるのはその程度であり、その性質は不変である。

今日の国際社会においては、そのような越境のプロセスの慣習に逆らうような性質



写真2 静岡県にあるブラジル・スーパーマーケット

が強調されている点が新しい (Appadurai 1996; Basch *et al.* 1994; Featherstone 1990; Guarnizo 1997; Kearney 1995) のである。例をあげるならば、Roger Rouse が行なったメキシコ人のアメリカへの移住に関する研究 (Rouse 2002) では、「トランスナショナルな移民回路」の出現について説明されている。彼は、これを新しい形の経済的グローバリズムへの労働者の対応と見なしている。トランスナショナルな移住は様々な世界を近づけるが、それは融合も均質化も生みださない。

ブラジルにいた時とほぼ同様のサービスや商品にアクセスできるシステムが構築されている日本のブラジル人社会についても同様のことが言える。このネットワークのおかげで、彼らは、自身のアイデンティティを再確認し、ブラジルという国家への帰属意識を子どもたちにも伝えることが可能であった。しかし、これは、移住した国に彼らが溶け込むことを妨げる要因でもあった。

両国をつなぐ要素の中で最も重要なものとして国際マスメディア、特にテレビの存在をあげることができる。テレビは国境を越えて影響をおよぼし、領土の意識を越えてあたかもブラジル人の居住地の中でブラジル人が一緒に暮らしているような幻想を作りだす。

例えば、日系ブラジル人は、ブラジルの食料品店、レストラン、軽食堂、衣料品店、ディスコ、バー、ブティック、理髪店、美容院、旅行代理店、語学学校、ビデオショップ、その他異国風のビジネス等、ブラジルならではの趣を備えた様々な高品質の製品やサービスを提供している。トランスナショナルな商品やサービスの取引は単なる経済取引ではなく、トランスナショナルな文化を形づくる商品化された意味とイメージ



写真3 大泉市のブラジル・レストラン

の取引でもある (Smith 1991)。

Minoo Moallem (2000) は、ヨーロッパやアメリカで暮らすイラン移民の企業家精神に関する研究の中で、自分自身の文化的アイデンティティーをビジネス活動の基盤にしているイラン人が多いことを明らかにしている。日本で暮らす日系ブラジル人の場合も同様である。移民にとっておなじみの商標、情的な象徴性をおびた商品名は、商品の購入の際、大きな役割を果たしている。

越境活動の下で、日系人がブラジルで暮らしていた時には特にブラジル人的だと言えなかったような文化行為が、ブラジルという国家への帰属意識の重要な指標となる。例えば、日系ブラジル人がブラジルでブラジルの料理を食べる場合、彼らはそれがあたりまえの料理だと考え、ことさらブラジル料理であるとか異国料理であると考えたりはしない。しかし日本で彼らがブラジル・レストランに行った場合、あるいはブラジル料理を作った場合、あるいは友人をチュラスコ（ブラジル風バーベキュー）に招いた場合、彼らは、彼らのブラジル料理が日本料理とは根本的に違うと言うことを強く認識することになる。移民にとって、懐かしい味は故郷の記憶を呼びさますものなのである。

フェイジョアーダ（ブラジルの代表的な料理）を食べると、週末に母親の家で兄弟やおいと過ごした日々を思い出す。当時、母親はよくフェイジョアーダを作ってくれた。もちろん今でも作ってくれるだろうが、今、私はここにいる。母の料理はとても美味しい。神様……懐かしい母、懐かしい家族達…… (Cibele, 35才の2世)

越境する文化にはブラジルと日本の間を流れるメディアのイメージや情報が含まれている。*The International Press*（最大の購読数をほこり、毎週 55,000 部を発行）と *Tudo Bem* は日本の日系ブラジル人の中で生まれたブラジル系のエスニック・メディアで、毎週ポルトガル語の新聞を発行している。その他、静岡、東京、名古屋、大阪のポルトガル語ラジオ放送もこの種のエスニック・メディアの一員であり、ニュース、日本で暮らす日系人の悩み相談、ブラジル音楽等の番組などを提供している。また、ブラジル移民を対象にした雑誌もいくつか存在している。

1996 年、「パーフェクト TV」と呼ばれるデジタルの多チャンネル放送を通じて、日系人はブラジルの衛星放送を見ることができるようになった。ブラジルからもたらされるニュースや TV 番組に含まれている情報や雰囲気を吸収することで、移住によって地理的に離れてしまった日系ブラジル人も、日本とブラジルで同胞達が共有している「ブラジル文化」との結びつきを保つことが出来る。これは他のブラジル人達との文化的な結合と親和性を生みだし、母国から遠く離れてトランスナショナルな社会で暮らす者達に仮想的な社会的一体性を感じさせる (Tsuda 2003)。

また日系ブラジル人は、近代的なコミュニケーションをはじめとする手段で結びつけられたことで、地理的に 1ヶ所にまとまらず、あちこちに分散した人々や団体が構成される真のトランスナショナルな社会を作りだすことに成功した。

遠く離れた者同士の間でも、手紙、電話、ファックス、電子メール等の非接触的なコミュニケーションやマスメディアを通じて、トランスナショナルな現実的あるいは仮想的な社会関係実現を可能にし、空間を克服して社会的結合を維持することができる。両国にまたがる日系ブラジル人の中で、個人レベルや団体レベルの関係が両国間で生まれた。このトランスナショナルな社会は、食品、衣類、雑誌、ビデオ等をはじめとする絶え間ない商品の流れと移民の往還の反復によっても強化されている。

Tsuda (2003) は、トランスナショナルな社会は、2つの方法で領土の概念から解放されていると考えている。第 1 に、国際的ネットワークを通じ、彼らは国家の国境を超越している。第 2 に、彼らは非近接的な空間に存在しているために、隣接空間や地理的な隔たりに付随する領土的な制約から解放されている。

グローバルレベルで通信が発達したために国境とは無関係に個人レベルで社会を形成することが可能になったが、これはトランスナショナルな社会が、常に仮想的な関係を基盤に成りたっていることを意味しているわけではない。日本の日系ブラジル人社会では、トランスナショナルな関係が、現実の直接的な隣接した関係にも劣らない知人同士の対話型のやり取りで成りたっていることが多い。境界線を越えて存在しているが、彼らは、家族、友人、親しい仲間といった個人的で親密なサークルを基盤にしていることが珍しくない (Hannerz 1996)。Rouse (1991: 13) は次のように指摘している。「通信技術と輸送技術によって地理的な隔たりに影響されなくなり、移民は、



写真4 浜松市のブラジル人学校

遠く離れた者達とも、まるで隣人同士のように活発かつ効果的につき合うことが出来るようになってきている。」

ブラジルと日本のもう1つの大きなつながりを示すものとしては、文化的なつながりを維持しているブラジル人学校の存在がある。浜松市のブラジル人学校の校長は次のように述べている：「私たちはブラジルの文化的価値観を守り、子どもたちがブラジルに戻っても困らないよう配慮している。」ブラジル人学校の中には、ブラジルの方針で教育を行なうためにブラジルから教師を招いているところもある。

### 2.3. 日系ブラジル人の宗教活動

越境するブラジル人社会においては、宗教（カトリック、プロテスタント、福音主義、心霊術、ウンバンダ、仏教）も非常に重要な要素となっている。筆者は、現地調査中、ブラジル人の移民社会での布教を目的に日本で教会を設立したブラジル人の宗教指導者に会う機会があった。興味深いことに、日本に移住してから、多くの者が定期的に教会に行くようになる。ブラジル人社会と日本人社会の両方に属しているがどちらにも十分に同化できない状況の中で、感情的あるいは心理的な問題の解決を宗教に求める者もいるのだと考えられる。

これらの宗教団体では、彼らが顔をあわせて日常的な問題について語り合い、互いに共感しあえるような場も提供している。

ブラジル人社会の要素として、カトリック教会、ウンバンダや心霊術を信じる人々のセンターは、慈善意識を通じて彼らが現在暮らしている社会とのかかわりを促し、

移民達が暮らしている土地への帰属意識を高める役割を果たしている。

日本のホームレスに食べ物や衣類を配っているグループはこの一例である。受入国の社会問題に日系ブラジル人がかかわっている例として、これらのグループは日本や日系ブラジル人のメディアからも注目されている。あるグループで責任者を務めている者は、「日本のホームレスに対して外国人が手を差し伸べていると日本人はびっくりする」と話している。筆者は、この現象を、日系ブラジル人を「臨時労働者」ととらえがちな日本人の意識を表わすものだと考えている。

日本におけるブラジル人社会の特徴を理解するためには、宗教活動に取組む移民の独自性を考慮し、ウンバンダや心霊術を信じる人々のセンターについて理解する必要がある<sup>3)</sup>。

### 3. ウンバンダ

ウンバンダとは、カトリック、カーデック、心霊術、アフリカ系ブラジル人の宗教が融合したものである。ウンバンダは、アフリカ系ブラジル人の宗教の中で最も新しい、最もブラジルのなものだと言うことが出来る。ブラジルにおけるウンバンダの歴史は、20世紀初めに Zélio de Moraes が率いた新興アフリカ宗教と心霊術の宇宙論を統合したニテロイの小グループに端を発している。

Caboclo das Sete Encruzilhadas (Seven Crossroads のブラジル系インディアンの精霊) と呼ばれる精霊に導かれて、モラエスとその信奉者は、アフリカ発祥の教義と儀式(特に動物の生贄を中心とする儀式)を捨て、宇宙階層における崇高な魂による慈悲深いスピリチュアル・ヒーリングを重視した。

ウンバンダは一神教者の信仰である。唯一人の最高神が存在し、多くの光の精霊が7つのラインのうち1つのために働いている<sup>4)</sup>。心霊術においては、巫女のようなトランス状態によって超自然界と接触し、肉体を持った精霊や肉体を持たない精霊を助ける。

19世紀中頃にフランスで確立されたことに起因して、またブラジルにおける実践者の社会経済的地位に起因して、心霊術はエリート主義的な信仰と見なされている。一般にウンバンダの信奉者の大部分は下層階級だと言われているが、それは、ブラジル人の社会における実際の社会的な構成や場所と一致するものではない (Brown 1979)。

ブラジルでは日系人のほとんどが中流階級である。しかし、日本では、彼らは、ホワイトカラーからブルーカラーへと社会的地位の低下に直面する。ミクロレベルで見た場合、ブラジル人社会では社会経済的な差はほとんど存在していない。したがって、日本におけるウンバンダと心霊術の信奉者達の場合、彼らの社会的地位にしたがって分類することは出来なくなっている。



心霊術とウンバンダでは、信奉者を導く精霊の種類が異なっている。心霊術では知的な精霊が中心で、霊媒は、医師や作家の精霊と協力する。ウンバンダの場合はもっと一般的な分野の精霊が中心で、性格も非常にブラジル人的で、ネイティブインディアン (*caboclo*)、年長の奴隷 (*pretos-velho*)、カウボーイ (*boiadeiro*)、わんぱく小僧 (*Zé Pilintra*) である。これらの精霊は、巫女のようなトランス状態を通じて出現する。

ウンバンダでは、アフリカ系ブラジル人にとって一般的な心霊術におけるカルマ、精霊とのコミュニケーション、連続した肉体化による霊的な進化等の概念を取り入れている<sup>9)</sup>。しかし、動物の生贄や熱狂的なダンスといった古い要素は排除されている。そういった意味で、ウンバンダの制度の中では、原始的なアフリカ崇拝の白化と心霊術的価値の黒化が交錯している (Ortiz 1978)。

アフリカと先住民の崇拝重視 (心霊術では後退的と見なされている) は、ウンバンダ最大の特徴である。ブラジル人の社会を構成している全てのエスニックグループや社会階級の親交促進を使命とする、ネイティブインディアンとアフリカ人の奴隷の精霊であるこれらの者 (最初は *pretos-velho* と *caboclo*) は、ウンバンダにおいて欠くことのできない存在となっている (Silva 1994)。

ウンバンダの信奉者は、地球を償いの場であり、前世で犯した過ちを償うために、またキリストの教えにしたがって生きることを学ぶために、そして知的にまた道徳的に進化するために自分たちがここにいると信じている。そして慈善活動は、道徳的な進化を促すものとなっている。

礼拝の典礼にアフリカの言葉を残しているグループもあるが、ウンバンダでは、精



写真5 日本のウンバンダ信奉者センターの祭壇

霊を呼び出すためにポルトガル語を用いてブラジルのカトリックに適合している。したがって、精霊は、アフリカの神でもあり、カトリックの聖人でもある訳である。

ブラジルにおけるカトリックとアフリカ系宗教の混合主義は、アフリカ人の奴隷の崇拝と彼らの福音伝道がポルトガルのカトリック教会に鎮圧された結果である。そのため、鎮圧に対するレジスタンス活動として、彼らは、自分たちの神とカトリックの聖人を結びつけて自身の信仰を守ろうとしたのであった。

## 4. Centro Espírita e Umbandista Vó Dita<sup>6)</sup> (C.E.U)

### 4.1. 設立

筆者が現地調査を実施した時、Centro Espirita e Umbandista Vó Dita (C.E.U.) は、愛知県刈谷市の心霊術信奉者とウンバンダ信奉者のセンターで、非営利ベースで運営されていた。このセンター<sup>7)</sup>は、2006年に創設された。それまでは、創設者の1人のアパートで会合が行なわれていた (Andressa<sup>8)</sup>)。信奉者が大幅に増え、騒音や人々の出入りで付近の日本人に迷惑がかかるようになった。さらに、駐車場の問題もあった。そこでもっと広くて便利な場所を探すことになった。

中核グループは僅か10名で、5年間でセンターを創立した。C.E.U.の目的は、人々を助けるというウンバンダのそれと同じである。

彼らの教義は、Allan Kardecが著わした「The Gospel According to Spiritism (心霊術による福音)」にもとづいている。これは、キリストの教えを簡単に心霊術に導こうとするものである。

Andressaはセンター長である。彼女は巫女で、C.E.U.の精神的指導者 Vó Ditaの助言者である。Vó Ditaはブラジルで奴隷をしていた年長の黒人女性、*preta-velha*<sup>9)</sup>の精霊である。Caboclo Sete Cachoeiras (ネイティブ・ブラジル・インディアンの精霊)は、G.E.U.で活動するもう1人の重要な精神的指導者である。どちらの精霊も、身体的問題と精神的問題を扱う。Vó Ditaは薬草、オイル、話しを扱う。Caboclo Sete Cachoeirasは、水を使って人を癒す。また、それぞれの事例に応じた精神的な薬も加える。

C.E.U.の最も重要な会合は金曜日に行なわれ、平均25名の者が参加する。最初の30分間は、心霊術にもとづく Gospelの学習である。次いで、Vó DitaとCaboclo Sete Cachoeirasによる個人コンサルティングが行なわれる。このコンサルティングは霊媒を通じて行なわれる。

### 4.2. C.E.U. 中核メンバー

中核メンバーのほとんどが、ブラジルでは心霊術にもウンバンダにも無関係の者達であった。移民特有の不安定性、依存症、人間関係の問題、社会的な問題、適応に関

する問題等のために彼らはこれらの信仰の信奉者となったのである。

宗教的な観点から彼らが他の移民と異なっている点は、慈善である。宗教的な義務感が、彼らが越境移民として直面する課題に立ち向かう支えとなっている。彼らは、慈善は物質的なものにとどまらず、感情や配慮といった精神的側面もあることを学んでいる。

人助けが出来るということは素晴らしいことです。私は、慈善というのは食べ物や衣類を提供することだと思っていましたが、慈善はそのような物質的なものにとどまるものではありません。抱きしめてほしい人がいれば抱きしめ、悩みを聞いてあげることも慈善です。全て C.E.U. で学びました。ここで私は本当の家族、私の精神的な家族と出会いました (Gabriela, 51 才の日系 2 世)

越境社会で生まれた非近接的な空間における関係とは対照的に、対面的関係を重んじる環境の中で信奉者の間に生まれるつながりもウンバンダセンターの大きな成果の 1 つである。

C.E.U. で働く人たちが、参加者とともにセンターを支えているが、全ての活動が無償奉仕である。C.E.U. で働く人たちには、毎月 5,000 円の献金が義務付けられている。参加者は、いつでも任意の額を寄付すること、あるいは一定額を毎月寄付することが出来る。この場合、参加者は *sócios mantenedores* (パートナー) となる。

霊的な活動の他にも、心霊術とウンバンダのセンターはボランティア活動も行なっている。活動の対象は日本人ホームレスで、移民が食糧や衣類を提供している。

中核メンバーは全員ブルーカラー労働者で、経済的な理由で日本に移住してきた者達である。しかしながら、心霊術とウンバンダに改宗してから、日本での彼らの目的は大きな変化を遂げた。彼らは、自分たちは、金儲けのためではなく宗教的な働きを通じて人々を助けるために日本に来たのだと考えている。

この点を明白にするため、筆者は、ルチアーノ (36 才の 2 世) とフラビオ (38 才の 3 世) という 2 人のブラジルからの移民の会話を紹介しようと思う。ルチアーノは信心深い人ではない。フラビオは C.E.U. の中核メンバーの 1 人である。

ルチアーノ：自分のような出稼ぎ労働者のほとんどはお金を儲けることが目的で、お金を稼いで貯金し、よい暮らしをするために、友だちや家族や仕事など、たくさんものをブラジルに残してきた。

フラビオ：よくわかるよ。私も、最初は、お金を貯めてブラジルに帰りたいと思っていた。だけど今は、ここで、たくさんやらなければならないことがあると思うようになった。人助けをすることが自分の使命だと思う。宗教活動は充実している。今、自分は健康で、仕事もある。これからも日本で暮らそうと思う。君は違うと思っているかもしれないが、偶然ここにやってきた者は 1 人もいないと思う。みんな、ここで何かすることがあったからここに来たんだと思う。きっと霊的な理由があったはずだと思う。

ルチアーノ：本当にそう思う？

フラビオ：もちろん！ 移民はみんな孤独で、心を癒すために霊的な助けを求めているんだ。

お金も家族も必要なものは何でもあるが、それでも何かが欠けていると相談に来る人もいる。その「何か」というのは、他の宗教では手に入れることができないもの、この世の使命は何か、なぜ自分はここにいるのか、私たちは死ぬために生まれてくるのか、いやそうではない、もっと何かがあるはずだ……

興味深いことに、中核メンバーの中には、自分たちだけではなく、ブラジル人全てが霊的な理由で日本に来たと考えている者がいる。彼らブラジル人の神秘主義者はこのような考えを抱き続けている。他の多くの国では宗教的な対立があり、戦争が起こっているところさえあるが、ブラジルは宗教に対して寛大な国として、「霊的な事柄に関する世界の中心」だと信じている。ブラジル人は、宗教的な相違に慣れている。1人でいくつもの宗教団体に属している者も珍しくはない。日本でも、多くの移民が様々な宗派に属している。

### 4.3. C.E.U. への人びとの期待

C.E.U.に参加している者達はほとんどが感情的な問題や健康上の問題を解決しようとしている。このセンターのセンター長である Andressa によると、かれらの多くが、身体的なものではなく霊的で、日本の医者では解決できないような問題の答えを求めているそうである。彼女は、どんなに検査を受けても彼らの霊的な問題や心理的な問題の本質を見つけることは出来ないと語る。彼女は、医者が薬をくれたとしても、効目はないのだとも述べている。

日本の医療制度では解決できない問題に対処しようと、参加者の多くが指導霊とのコンサルティングを希望する。「健康上の問題が起こった時はいつでも C.E.U. に行きます。以前は日本の医者に診てもらっていたけど、だめだったの」（Karla, 42 才の 3 世）。1990 年代のはじめ頃、日本語が出来なければ医師と患者の関係を築く上でマイナスだと考えられていた。しかし現在では、愛知県の病院の多くがブラジル人患者のために通訳者を提供している。したがって、日本語が出来なくても大きな問題ではない。それよりも、筆者に情報を提供してくれる人たちが日本の医者を利用していないという点が問題になっている。彼らは、日本の病院の設備は優秀だが、医師達は患者とどうしたらよい関係を築けるかということを知らず、みんな非常に冷たいと考えている。日本の薬を利用していないブラジル人も多い。彼らは、ブラジルから薬を持参してきている。そしてその薬がなくなると、友だちや親戚に頼んで送ってもらうのである。

国境を越えた移民達のライフスタイルは健康に影響をおよぼしている。ブラジル人は働き過ぎで、その結果休息が不足する。ブルーカラー労働者が従事している日夜交

替作業の仕事も問題である。ハードワークに加えて、食事の内容にも問題がある。彼らは肉を摂りすぎ、果物や野菜はほとんど食べていない。ある日系人は筆者に「みんなお金を節約することばかり考えて、健康に気をつけることを忘れてしまっている」と語っている。このような状況では、病気にならないのが不思議なくらいである。

Andressa センター長は、全ての身体的な病気が霊的な問題と関連があると述べている。彼女は、このような問題の多くが主としてペリスピリットにあると説明している<sup>10</sup>。他の生命体の問題が浸透すると、自分の肉体がなくなった後も、その問題はペリスピリットにとどまる。その後自分が生まれ変わって肉体を持った時、自分の肉体でまたその問題を感じる。したがって、このような霊的な問題がある種の病気の素因となるのであると彼女は述べている。

Andressa センター長は、「日本では、ここで行なわれた様々な戦いや、戦国時代前後の侍同士の戦いで、過去に多くの人々が悲劇的な死を遂げている」とも語っている。他の国にも同じような歴史がある。しかし、日本にはマイナスのエネルギーがあるのだという。日系人は、彼らの祖先の時代の霊的な問題を抱えて日本にやってくる。そして、彼らが日本に到着すると、その問題が強まるというのである。

C.E.U.の中核メンバーのある者は、霊にとりつかれている参加者がたくさんいるが、除霊がうまくゆかない場合もあると話している。ほとんどの場合、何度かコンサルティングを重ねて、霊の分離が行なわれる。彼らは、助けを求めてやってくる参加者にとりついている霊の大部分がブラジル人ではなく日本人だとも語っている。これらの霊は、日本にやってきた日系人と過去に何らかのかかわりがあったものである。

参加者は、霊的な問題に気付いておらず、ただ身体的な症状を何とかしてもらおうと思っているケースが多い。

情緒的な癒しを求めてC.E.U.に参加する人も多い。移民は、今までとは違った社会的ルールと文化的ルールの下で生活しているために、心理的に不安定になりやすい。家族と別れて日本で孤独に暮らしているブラジル人がたくさんいる。このような状況が宗教を重視する姿勢につながる。

また、不安定な霊媒能力に起因する問題を解決しようと、C.E.U.に参加する者も大勢いる。「工場で時々霊が見えます。誰もいないのに声が聞えます。とてもこわいです」(パトリシア, 24 歳の3世)。このような場合、指導霊や仲間とのコンサルティングとは別に、彼らは、霊媒能力のメカニズムに関する理論と実際を教える教室に参加するよう勧めている。

## 5. 結 論

今日、海外に出ても依然として出生国との結びつきを保つことが出来るため、移住

は、ある場所を捨てて恒久的に別の場所に移ることを意味するものではなくなった。移民は、事実上恒久的に移住先の社会に定住し、出身国と移住先との間にある国境を超越して、トランスナショナルな社会・文化システムの一部になる (Olwig and Sørensen 2002)。

日系ブラジル人は、日本とブラジルの上に社会的および組織的なネットワークを作りだし、情報、商品、人の流れを増大させた。日系人社会は、ブラジルという国家の領土を超越して事実上国境を越えた存在にまで拡大した。

日系人が経験した、ポジティブな存在からネガティブな少数集団へ移行することによる疎外感、そして日本における彼らのブラジル人らしさの認識が日本の中に「リトルブラジル」を生み出した。

越境経験の中で、移民達は、自身のアイデンティティを再確認し、ブラジルという国家への帰属意識を子どもたちにも伝えることが可能となった。これによって彼らは自身の文化的アイデンティティを守ることが出来たが、同時に、移住した国に彼らが溶け込むことを妨げる要因でもあった。

ウンバンダや心霊術といった宗教は、国境を越えた社会の中で、ブラジル人社会の中で信者に孤立を促すことなく、移民のアイデンティティに関して別の意味での役割を果たした。慈善という考えを通じて、彼らは日本の社会との交流を促進した。日本人ホームレスに食糧や医療を提供することによって、彼らは、日本国民に劣らず日本の社会的な問題に関心を抱いていることを示した。

加えて、ウンバンダの信奉者が確立した関係パターンは、トランスナショナルな社会の他のメンバーが確立したものとは異なっていた。これは現実的かつ仮想的な社会関係を維持するためにウンバンダの信奉者が非接触的なコミュニケーション (手紙、電話、電子メール等) を使わなかったということの意味しているのではない。彼らは、社会生活の中で対面的な関係を重視したのであった。

霊的なレベルにおいて、ウンバンダを信仰する移民は、自分たちが転生した同胞を助けるだけでなく、死を受入れることが出来ずにこの世にとどまっている日本人の霊も助けているのだと考えている。このような霊はブラジル人の参加者に取りつき、指導霊による治療を受けることが出来る。彼らは、外国で単純労働者として働き、ブラジル人や日本人の霊を助けることで、移民達は自尊心を高める。

ウンバンダの信奉者である者とそうでない者を比較すると、ウンバンダの信奉者の方が経済的な成果に無頓着である。日本に移住した時の目的は金銭的なものであったが、数年の内に、宗教の方がもっと大切だということに気付いている。彼らは、例えば、霊的な活動を行なうために残業を好まない。このようにして宗教に打ちこむことを通じて、彼らは人助けを行ない、その結果自分自身の霊性と道徳性を改善する。彼らは、地球を償いの場であり、前世で犯した過ちを償うために、またキリストの教え

にしたがって愛を学ぶためにここにいる，そして慈善活動は道徳的な進化を促すものと信じている。

移民のこのような生活信条は，日本人への従属意識とホワイトカラーからブルーカラーへと低下した自身の社会的地位を和らげる。ウンバンダの信奉者も，他のブラジル移民と同じように，自分自身のブラジル人らしさを非常に大切にす。しかし，外国人と日本人の関係を難しくしている文化的な違いによって，彼らが日本人を地球上における仲間だと考えることが妨げられることはない。

生活水準を高めるためにお金を儲けて故郷に帰ること，それが世界中に存在するほとんどの国境を越えた社会の夢である。しかし，ウンバンダの信奉者が日本における自身の霊的な使命を引受けた時，彼らの将来は大きく変化し，日本における滞在は一時的なものではないと考えるようになる。つまり，彼らは，ブラジル人の移民の間で一般的になっているように過渡的な状態に捕らわれることなく，どちらの社会にも属さずに宙ぶらりんになることもない (Turner 1969)。彼らも依然として故郷に愛着を持っており，文化的なアイデンティティーを誇りに感じている。しかし，彼らは，今，自分たちが日本の社会の一員であるという事実を否定することはしない。したがって，彼らは，自分をブラジル人社会から隔離することもしない。彼らは今こそ，日本の国民と積極的にかかわっていると見えよう。

## 注

- 1) 法務省入国管理局「外国人登録者統計」(2005)。
- 2) 韓国人が最大勢力，そして中国人が第2の勢力となっている。
- 3) ウンバンダと心霊術は日系人の中で信奉者が増えている。
- 4) ウンバンダの神話には明確な階層が存在している。宗教上の存在は7つのラインに分類される。それぞれのラインは7つのグループといくつかの小グループに分かれる。それぞれのラインは高位の精霊である Orixá またはカトリックの聖人の監督下にある。Orixá は仲介的な神で，最高神 *Olorum* の名の下で働いている。ウンバンダの教義はアフリカの宗教の影響を最も強く受けている。これらのラインは，肉体を持たない様々な段階の精霊で構成されている。7つのグループは，*Caboclos* と *Pretos Velhos* の精霊で構成されている。*Caboclos* はネイティブ・ブラジル・インディアン人の精霊である。薬草に関する豊富な知識を持っている。*Pretos Velhos* は年長の奴隷達の精霊である。謙虚で賢く，平和を好み，親切的な精霊。苦しみ，慈悲，許し，希望の全てを熟知している。薬草治療を行なえる。
- 5) カルマとは，ヒンドゥー教や仏教でいうところの原因と結果の循環である。人がかつて行なったこと，現在行なっていること，将来行なうこと全ての和である。カルマは罰や報復，懲罰，報酬などではなく，現在あるがままをいう。あらゆる行ないが過去，現在，未来の経験を作りだす。したがって，人はその者の人生と他の者にもたらした痛みと喜びに責任を負う。心霊術やウンバンダのように生まれかわりを信じる宗教の場合，カルマは，過去，現在，将来の全ての人生におよぶ。
- 6) Vó Dita Spiritist and Umbandist center.

- 7) *Centro* はウンバンダが活動する物理的な場所を言う。
- 8) プライバシー保護のため、情報提供者の氏名は変更されている。
- 9) *Preta velha* とは、ポルトガル語で年輩の黒人女性のこと。
- 10) 「ペリスピリット (Perispirit)」という言葉は Allan Kardec が「*The Book on Mediums* (霊媒に関する書物)」で使った彼の造語で、流体ボディーを表わす。流体ボディーは繊細で半物質的であるために、物理的な身体(物質)と霊(非物質)とを結びつける働きがある。

## 文 献

- Appadurai, Arjun  
1996 *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Basch, Linda, Nina Schiller and Cristina Blanc  
1994 *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation-States*. Amsterdam: Gordon and Breach Publishers.  
1995 From Immigrant to Transmigrant: Theorizing Transnational Migration. *Anthropological Quarterly* 68 (1): 48–63.
- Brody, Betsy  
2002 *Opening the Door: Immigration, Ethnicity and Globalization in Japan*. New York: Routledge.
- Brown, Diana  
1979 Umbanda and Class Relations in Brazil. In Maxine L. Margolis and William E. Carter (ed.) *Brazil: Anthropological Perspectives: Essays in Honor of Charles Wagley*, pp. 270–304. New York: Columbia University Press.
- Featherstone, Mike  
1990 *Global Culture: Nationalism, Globalization and Modernity: a Theory, Culture and Society Special Issue*. London: Sage.
- Foner, Nancy  
1997 What is New about Transnationalism? New York Immigrants Today and the Turn of the Century. *Diaspora* 6 (3): 355–375.
- Guarnizo, Luis Eduardo  
1997 The Emergence of a Transnational Social Formation and the Mirage of Return Migration among Dominican Transmigrants. *Identities: Global Studies in Culture and Power* 4 (2): 281–322.
- Hannerz, Ulf  
1996 *Transnational Connections: Culture, People, Place*. London: Routledge
- Kearney, Michael  
1995 The local and the Global: The Anthropology of Globalization and Transnationalism. *Annual Review of Anthropology* 24: 547–565.
- Mintz, Sidney  
1998 The Localization of Anthropological Practice: From Area Studies to Transnationalism. *Critique of Anthropology* 18 (2): 117–133.



- Moallem, Minoos  
 2000 “Foreignness” and Be/longing: Transnationalism and Immigrant Entrepreneurial Spaces. *Comparative Studies of South Asia, Africa and the Middle East* 20 (1&2): 200–216.
- Olwing, Karen and Ninna Sørensen  
 2002 Mobile Livelihoods: Making a Living in the World. In Karen Olwing and Ninna Sørensen (eds.) *Working and Migration: Life and Livelihoods in a Globalizing World*, pp. 1–19. London: Routledge.
- Ortiz, Renato  
 1978 *A Morte Branca do Feiticeiro Negro*. Petrópolis: Vozes
- Portes, Alejandro and Rubén Rumbaut  
 1996 *Immigrant America: a Portrait*. Berkeley: University of California Press.
- Rodrigues, Nina  
 1976 *Os Africanos no Brasil*. São Paulo: Cia Editora Nacional.
- Roth, Joshua  
 2002 *Brokered Homeland: Japanese Brazilian Migrants in Japan*. New York: Cornell University Press.
- Rouse, Roger  
 1991 Mexican Migration and the Social Space of Postmodernism. *Diaspora* 1 (1): 8–23.  
 2002 Mexican Migration and the Social Space of Postmodernism. In Jonathan Xavier Inda and Renato Rosaldo (eds.) *The Anthropology of Globalization*, pp. 157–171. Blackwell Publishers.
- Sellek, Yoko  
 1997 Nikkeijin: The Phenomenon of Return Migration. In Michael Weiner (ed.) *Japan’s Minorities: The Illusion of Homogeneity*, pp. 178–210. Great Britain, Routledge.
- Silva, W.W. da Mata  
 1996 *Umbanda do Brasil*. São Paulo: Ícone.
- Silva, Vagner Gonçalves da  
 1994 *Candomblé e Umbanda: Caminhos da Devoção Brasileira*. São Paulo: Ática.
- Smith, Anthony  
 1991 *National Identity*. Reno: University of Nevada Press.
- Takahashi, Hidemine (高橋秀実)  
 1995 『にせ日本人探訪記—帰ってきた南米日系人たち』 (*Nise Nipponjin Tambouki-Kaette Kita Nanbei Nikkeijintachi*) 東京: 草思社 (Tokyo: Soushisha)
- Tsuda, Takeyuki  
 1999 The Permanence of “Temporary” Migration: the “Structural Embeddedness” of Japanese-Brazilian Immigrant Workers in Japan. *The Journal of Asian Studies* 58 (3): 687–722.  
 2003 *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective*. New York: Columbia University Press.
- Turner, Victor  
 1969 *The Ritual Process: Structure and Anti-Structure*. Ithaca: Cornell University Press.
- Weiner, Michael  
 1997 *Japan’s Minorities: The illusion of Homogeneity*. Great Britain: Routledge.